

高田昭二著

中国近代文学論争史

風間書房

著者略歴

昭和2年 岡山県に生まれる
昭和25年 第六高等学校文科卒業
昭和28年 東京大学中国文学科卒業
現 在 大東文化大学文学部教授

著 書 「魯迅の生涯とその文学」(大明堂)
訳 書 茅盾「子夜」上下(岩波文庫)

現住所 〒186 国立市北1-3-5
ヒルクレスト301
0425-73-9622

平成2年1月5日 印刷
平成2年1月15日 発行

(検印省略)

中国近代文学論争史

定価 四、九四四円

(本体四、八〇〇円)

著 者 高田昭二

発行者 風間 務

印刷者 腰越 誠二

発 行 所

株式会社 風 間 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田神保町一の三四

電話 (二九一) 五七二九番

振替 東京 一八一八五三番

(有朋製本)

ISBN4-7599-0752-1

まえがき

中国の近代文学についてわたしの印象を一口で言うならば、北国の短い春という感じである。わたしは青年時代に長春の春を過ごしたことがある。この地の春は、その地名に似ず、ほぼ二週間。咲き出る花々は本来の序列を無視して、この短い期間に、梅も杏も桃も、果てはつつじや藤の花までも一斉に開花するのである。百花繚乱と言えば聞えがいいが、中国近代文学の場合はまだ咲き急ぐという感のみ深い。このあわただしさは、当然のことながら、それを生み出した中国近代社会そのもののそれであった。前近代と超近代のはざまに挟まれながら、しかもその両者から絶えず掣肘を受けている、これが中国における「近代的なもの」すべてに課された宿命であるようにわたしには思われる。

それにもかかわらず、これらの花々は咲き急がねばならなかった。春は短いのであるから。中国近代文学を代表する作家が魯迅であることは、何人も否定しないであろう。彼はその生涯における文学活動において、自分にふさわしい文学形式を追求し続けたのであるが、その一時期「野草」と名づけた一群の作品を発表している。これらの作品は、わたしの考えでは、小説という形式に飽き足りなくなった彼が、より直接的に自分の想念を吐瀉しようとした試みであるが、その形式は散文、詩、戯曲などさまざまであり、すべて短いものであった。そして更に後年、彼はこれらの作品を一冊にまとめて上梓する際、「野草題辭」なる一文をその巻頭に付した。その中にこういう文章がある。

生命的泥委棄在地面上，不生喬木，只生野草，這是我的罪過。

野草，根本不深，花葉不美，然而吸取露，吸取水，吸取陳死人的血和肉，各各奪取牠的生存。當生存時，還是將遭踐踏，將遭刪刈，直至於死亡而朽腐。（中略）

我自愛我的野草，但我憎惡這以野草作裝飾的地面。（中略）

我以這一叢野草，在明與暗，生與死，過去與未來之際，獻於友與讎，人與獸，愛者與不愛者之前作證。

（生命的泥は地上に委棄され、喬木を生ぜしめず、ただ野草を生ぜしむるのみ。これはわたしの罪である。）

野草は根は深くなく、花は美しくない。それでも露を吸ったり、水を吸ったり、古い死者の血と肉を吸ったりして、それぞれ何とか生きている。生きている時も、踏まれたり刈り取られたりする危険に曝され続け、やがて死亡し朽ちはてる。（中略）

わたしはわたしの野草を愛する。だが野草を裝飾としている地面を憎む。（中略）

わたしはこの一叢の野草をもって、明と暗、生と死、過去と未来の間において、友と仇、人と獸、愛する者と憎む者との前に献げて証とする。）

これは彼の短文集「野草」に付された題辭である。しかしわたしにはこの「題辭」が、彼の生涯にわたる文学的業績の本質をわれわれに示していると思われる。彼は明と暗の間において、友と仇に対して、誇らかに自らの「野草」を掲げ示している。彼はそれが色彩豊かな大輪の花ではなくて、みすばらしい野草の花であることを誇っているのではない。たとえそれがみすばらしい野草の花にもせよ、一時期この世に生存し得たという事実を誇りとしているのである。

魯迅の自己の文学に対するこのような認識の裏側には、彼をとりまく苛烈な状況への思い入れがある。野草は瘦せた地味に耐え、はげしい霜に抗して花を咲かせねばならなかったのである。そしてこのような文学状況は、魯迅にお

いて典型的に看取されるが、彼以外の中国近代文学を支えた人々にとっても、全く同様のものではなかった。苛烈な状況の下で中国近代文学をどのように育てて行くか、彼らのひとりひとりが、それぞれの主体性において、この問題と直面しなければならなかった。苛烈な状況とは何か。

中国近代史の出発点をアヘン戦争（一八四〇年）に置くということは、象徴的な意味においても、まことに当を得ている。中国の近代化は、それをしも近代化というとするれば、言わばマイナスの近代化であった。それは旧来の封建的文化の重圧と列強の帝国主義的侵略という二重の桎梏がますます締めつけの度を加えて行くというプロセスであった。人々はこのような状況の下で「近代」を模索しなければならなかった。政治においても、文学においても。

然しながら一方において、歴史はまた、この苛烈な状況をスプリングボードとして、中国近代史を飾る幾多の傑出した人物をも輩出させてもいる。その最大傑作が毛沢東と魯迅であったとわたしは思う。

さて本稿におけるわたしの試みは、厳しい状況の下で短い開花期を持った中国近代文学史の流れを、その間に戦わされた幾つかの論争をとり上げることによって跡づけてみようとするものである。そしてここでも魯迅が屢々中心となる。

目次

まえがき 五

第一章 中国近代文学観の成立について 一

第一節 日・中にとって近代文学とは 一

第二節 梁啓超の文学観 二

第三節 坪内逍遙の「小説神髓」 九

第四節 中国近代文学が志向するもの 一四

第二章 魯迅 二七

第一節 「魯迅の骨は最も堅い」 二七

第二節 陳独秀と「新青年」 二九

第三節 「文学革命」と魯迅 三〇

第四節 「狂人日記」浅析 三六

第五節 それぞれの「五・四」 六

| | | |
|-----|--------------------------------|-----|
| 第三章 | 文学研究会と創造社 | 七 |
| 第一節 | 「五・四」新文化運動 | 七 |
| 第二節 | 文学研究会の性格 | 八〇 |
| 第三節 | 創造社の文学観 | 一〇四 |
| 第四節 | 張資平「木馬」について | 一三四 |
| 第四章 | 「革命文学」論争について | 一四一 |
| 第一節 | 「革命文学」の誕生 | 一四一 |
| 第二節 | 郭沫若と後期創造社との相違 | 一五四 |
| 第三節 | 「革命文学」論争 | 一六六 |
| 第四節 | 瞿秋白「魯迅雜感選集序言」 | 一八四 |
| 第五章 | 文芸大衆化の問題点 | 一八七 |
| 第一節 | 左翼作家連盟の成立 | 一八七 |
| 第二節 | 文芸大衆化に関して瞿秋白と矛盾との間に交わされた論争について | 一九二 |

| | |
|--------------------|----|
| 第六章 「国防文学」論争について | 二七 |
| 第一節 左連受難 | 二七 |
| 第二節 若干の歴史的状況について | 三〇 |
| 第三節 論争の経過 | 三九 |
| 第四節 二つのスローガンをめぐる対立 | 四〇 |
| 第五節 茅盾と「国防文学」 | 四五 |
| あとがき | 四五 |

第一章 中国近代文学観の成立について

第一節 日・中にとって近代文学とは

先ず中国近代文学観の成立について、日本の場合との比較を交えつつ考察することから始める。両国の近代文学に關心のあるわたしにとって、両者を比較考察するという仕方は、それぞれの真面目に光を当てるに適當な方法であるように思えるからである。

なお、あらかじめ本章の内容について一言するならば、中国でも日本でも、近代文学というものは、先進の——主として西欧の——文学に学んで、それぞれ独自のものを生み出し、育てて行くという過程をたどった。

中国でも日本でも、西欧文学の輸入は、政治、経済を初めとする文化全般にわたる彼の地の「近代」を輸入することの一環であった。そして文学の場合は、その「近代」を非現実の世界で先取りすることによって、自国の「期待される近代像」への水先案内人的な役割が課されていたと言えよう。西欧近代社会の思想、宗教、倫理・道徳、風俗・習慣などが、近代文学というパイプを通して入って来る。それらを自国の近代化のためにどう摂取し、消化して行くかということが、彼らの近代文学に課せられた中心的課題であった。この点では中国の場合も、日本の場合も変

わりはない。彼らの文学が「人生とは何か」「われら如何に生くべきか」などのテーマを中心に据えた、いわゆる「人生のための文学」であらねばならなかった所以である。

ただ、両国それぞれの近代文学が、それぞれの担い手たちの現実的要請を反映しているのであってみれば、両国の近代化の様相の厳然たる相違が、両者両様の近代文学を育てて行くことになるのは当然の成り行きであった。

本章では初期輸入段階における両国の先達たちが、彼らの近代文学——彼らは共にそれを「新文学」と呼んだ、これは暗合であろうか——に寄せる期待、願望を探ることによって、両者それぞれの近代文学観の成立について比較考察する。

第二節 梁啓超の文学観

まず梁啓超のことから始める。わたしは彼を中国近代文学の最も有力な水源であると思うからである。

梁啓超は周知の如く戊戌新政（一八九八年）の中心人物のひとりであり、中国近代の夜明けに当って、大きな政治的役割を分担した愛国、憂国の士であったが、同時に彼は熱血多感なジャーナリストとして、数々のすぐれた業績をのこしている。わたしが思うに、その豊かな学殖、鋭敏な時代感覚、すぐれた文学的センスなど、その時代の啓蒙的新聞人として必用な特質を、彼はすべて備えていた。上海及び横浜で数度にわたって発行された彼の新聞が、大きな影響力を発揮したのはむしろ当然であった。彼の新聞には先進国の国家思想や民権思想についてその主要な学説が紹介されると共に、一方中国の近代化に関して、政治、社会、文化にわたる数々の時宜を得た提案が見られる。また

彼の新聞のもうひとつの魅力は、彼自ら「新文体」と称したその清新で歯切れのよい文章にあった。南京の鉅務路学堂の学生であった魯迅も、四川省嘉定府の中学生であった郭沫若も、また湖南省の田舎町湘郷の高等小学生であった毛沢東も彼の新聞の熱心な読者であった。なお梁のこの「新文体」については、彼の長年の同志黄遵憲が強くこれを称揚している。黄は清末を代表する詩人であったが、外交官として世界を周遊した経験を持つ、新しいタイプの知識人でもあった。彼は清末「詩界革命」の中心の実践者として口語詩の熱心な提唱者であり、彼が梁の「新文体」を称揚したのも、そこに彼の文学的主張の、散文における実践を見たからであった。

やがて事敗れて梁は日本に亡命する。日本政府は彼のこの亡命を助けるために軍艦一隻を用いている。日本滞在中も彼は厚遇を受けていた。この事は故国の妻に宛てた彼の手紙にも見られる。日本政府としてみれば将来への政治的思惑があつたのであつたらうが、梁自身もまた日本の水が肌に合っていたようで、大変な日本虜奴であった。彼は日本の自然と人情を愛し、自ら吉田晋と名乗り、娘は静子と命名して日本人の学校に通わせた。海水浴が大好きで、横浜の海で泳いだ帰りに食べるアイスクリームの味が無類であるというので、飲冰室主人と号した。因に吉田という姓は彼の尊敬する吉田松蔭にあやかつたものである。日本の明治維新をお手本として中国の近代化を謀るといふ彼の政治思想に基づいている。

このような環境の下で、彼は横浜を拠点に啓蒙運動を再開し、新聞、雑誌の刊行を精力的に行っている。月刊誌「新小説」(一九〇二年発刊)もそのひとつであった。この雑誌の内容を一口で言うならば、政治小説を中心とする西欧小説の紹介と、それらの中国への移植の試みとであった。彼の政治小説への傾倒はすでに日本亡命以前からのものであった。そしてここでも日本人が介在する。日本の政治小説界の草分けのひとり「経国美談」の作者矢野竜溪

が、当時日本国公使として北京に在り、梁と親交があったことが知られている。「新小説」は彼の政治小説への積年の思いの発露であったと言えよう。

わたしが思うに、文学面における梁啓超の最大の貢献は、早くより政治小説を紹介、鼓吹することによって、文学的社会的意義（価値）を示したことであろう。文学は男児一生の事業たり得ると若き日の魯迅に確信させたのは彼の文章であった。わたしは政治主義であれ、芸術主義であれ、近代文学を成立させている基盤はこの文学における社会的意義（価値）の理念にあると思っている。少しドライな言い方をすれば、それが近代社会における文学の商品価値なのである。

さて、右の如く「新小説」は梁の文学的主張の拠点であったが、彼はこの雑誌の創刊号の巻頭に「論小説與群治之關係」なる一文を掲げている。この論文は実質的に同誌の「発刊の辞」であり、また多年にわたる彼の政治小説への思いの集大成でもあった。（なお題名中の「群治」とは「民主政体」の意である。今日では死語となっているが、恐らく彼の造語であろう。彼は「説群序」（一八九四年）なる文章でも、「以群術治群、群乃成。以獨術治群、群乃敗。（民主制で民衆を治めればうまく行く。独裁制で民衆を治めれば駄目になる。）」と言っている。「群治」はこの「以群術治群」を更につづめたものであろう。）次に同論文の冒頭から引用する。

欲新一國之民，不可不先新一國之小説。故欲新道德，必新小説。欲新宗教，必新小説。欲新政治，必新小説。欲新風俗，必新小説。欲新學藝，必新小説。乃至欲新人心欲新人格，必新小説。何以故。小説有不可思議之力支配人道故。

（一國の人民を新たにするには、まずその國の小説を新たにしなければならぬ。それ故道德を新たにするには、小説を新

たにしなければならぬ。宗教を新たにするには、小説を新たにしなければならぬ。政治を新たにするには、小説を新たにしなければならぬ。風俗を新たにするには、小説を新たにしなければならぬ。学芸を新たにするには、小説を新たにしなければならぬ。要するに人心を新たにし人格を新たにするには、小説を新たにしなければならぬのである。何故であるか。小説には人間の行いを支配する不可思議な力があるからである。)

氣力充実した堂々の冒頭である。彼は小説の効用の絶大なることを力説しているのである。「民を新たにす(新民)」とは、宋儒以来、人民の旧染を革めてこれを善導するの謂であるが、彼は政治小説によってその達成を期しているのである。しかし彼自身文学に対して、もともと右のような功利的なアプローチしかできないかというところ、決してそうでない。詩文に関する教養も深く、その方面の立派な著作もあり、とりわけ小説は大好きであった。そうでなかったらこの論文は生まれなかったであろう。小説を持つ「不可思議之力」への信仰こそが、その論文執筆の原動力であった。事実、この論文の大部分はその「不可思議之力」への解明に当てられ、彼はそこで自らの体験に照らして、小説が人心に及ぼす影響力の種々相について縷々力説している。もっともその際彼が材料として挙げているのは、「水滸伝」や「紅樓夢」であって、政治小説鼓吹のための用例としてはいささか適當でないようにも思われるが、ともかく彼の小説体験の深さは十分に証明されている。小説好きの彼が書いたこの論文が、当時日本に留学していて、前途に思い悩んでいた、これも小説大好きの若き魯迅にやがて大きな影響を与えることになる。

然しながらこの論文で彼が強調しているのは、あくまでも小説における効用面の作用であり、小説鑑賞の楽しさではない。彼のこのような発想を支えているのは何か。わたしはそこに時代の指導者としての彼の使命感を見る。

X

X

X

一八九六年梁啓超は、先に挙げた黄遵憲らの支持を得て、上海で「時務報」という新聞を主宰した。彼のジャーナリストとしての第一歩である。同じ年彼は門下生たちの西学学習のための指針として「西学書目表」を著し、それに「西学書目表後序」なるものを付した。以下はその「後序」の結語の部分である。

要之舍西學而言中學者，其中學必爲無用，舍中學而言西學者，其西學必爲無本。無用無本，皆不足以治天下。雖庠序如林，逢掖如鯽，適以蠱國，無救危亡。方今四彝交侵，中國微矣。數萬萬之種族，有爲奴之病，三千年之宗教，有墜地之懼。存亡絕續，在此數。學者不以此自任，則顛覆慘毒，甯有幸乎。曾子曰，士不可以不宏毅，任重而道遠。仁以爲己任，不亦重乎。死而後已，不亦遠乎。是在吾黨。

(これを要するに、西学を捨てて中学のみを言う者は、その中学は必ず役に立たないし、中学を捨てて西学のみを言う者は、その西学は必ず主体性がない。役に立たぬもの、主体性のないもの、どちらもそれで天下を治めることはできない。たとえ学舎が林の如く立ち並び、学者先生が鮒の如くうようよ居ようとも、国を蝕み害するのがせいぜいであって、危急存亡の秋の役には立たない。現在四方の異族がこもこも侵入し、中国の国威は衰え果てている。数億のわが民族は奴隷の苦しみを舐め、三千年来の祖宗の教えは地に墮ちようとしている。国家の存亡はこの数年に掛かっている。学者がこのことを自らの任務としないならば、無残な顛覆をなんで免れることができようか。曾子曰く、「士は宏毅ならざるべからず、任重くして道遠し。仁以て己の任と爲す、また重からずや。死して後已む、また遠からずや」と。すべてわが同志の双肩に掛かっているのである。)

曾子曰く云々は「論語」からの引用である。以てその意気を示した。中国衰えたり、四囲の異族こもこもわれを侵し、今や祖国は危急存亡の秋に直面している。学者たるものの任たるや重くかつ遠い。彼の救亡への強い使命感をここに見ることができる。指導者としての自覚と言ってもいい。旧来の伝統文化の殻に閉じこもっていたのでは、世界の潮流に即応することはできない。殻は破られねばならぬ。そのことを敢て公言する勇気を彼に与えてくれたのは嚴

復であった。この当時彼は嚴復に傾倒していた。

嚴復は梁より一世代前の（年齢差二十）代表的知識人であった。彼は若くして海軍術習得のためにイギリスに派遣され、その間に接した西欧近代思潮の数々を、帰国後翻訳紹介したことで有名である。彼の著訳書は後進たちの目を世界に開かせるのに大いに貢献したが、なかでも「天演論」（一八九八年刊）の影響力は甚大であった。同書は当時ヨーロッパに喧伝されていた社会進化説を中国に紹介したものであったが、これは警世の書であった。ハーバート・スペンサーらによって唱えられたこの学説は、ダーウィンの進化説中の「適者生存」「弱肉強食」などの用語によって、ヨーロッパ資本主義のアジャ・アフリカにおける植民地政策を正当化しようとする、生物学上の法則と人間社会の倫理を混淆する俗論であった。今日この論のバカさ加減を指摘することは容易であるが、当時の中国人にとっては、アフリカ諸国やお隣の大国インドの現状に鑑み、またアヘン戦争以来の自国の情況を顧るならば、それはまさに衝撃的な一撃であった。紹介者嚴復にとっても、魯迅ら読者にとっても、当時南京の学生であった魯迅は、この書物をはじめて買った日のことを、ずっと後年「瑣記」という短篇小説の中で昨日のことのようにありありと描いている。

梁は当時この嚴復の、広い視野と伝統思想に捕われないうべらるな思想に傾倒していた。先の「西学書目表後序」と同年（一八九六年）に書かれた彼の「與嚴幼陵先生書（嚴幼陵先生への手紙）」は、こういう書出しで始まっている。「幼陵先生、二月間讀賜書二十一紙。循環往復誦十數過、不忍釋手、甚爲感佩、迺至不可思議。今而知天下之愛我者、舍父師之外、無如嚴先生、天下之知我而能教我者、舍父師之外、無如嚴先生。（幼陵先生、二月中お手紙二十一枚拝讀いたしました。繰り返し十數回も拝讀いたしました。また手から放すに忍びず、感服すること甚だしく、われながら不思議なほどであります。今にして知りました。天下のわれを愛する者、父師の外嚴先生の如きものはなく、天下のわれを知り且つわれをよく

教える者、父師の外戚先生の如きものはないことを。」以て傾倒ぶりを見ることが出来る。

この公開書簡の中で彼はこう言っている。

來書又謂教不可保、而亦不必保。讀至此則據案狂叫、語人曰、不意數千年悶胡蘆、彼此老一言揭破。不服先生之能言之、而服先生之敢言之也。

（お手紙にはまた「教えは保つことはできないし、また保つ必用もない。」とありました。読んでここに至り、机に依って狂叫し、人に語って、「數千年來の迷妄が、実にこの方の一言によって打開されようとは。」と申しました。先生がこのことを言うことが出来になったことに感服したのではなく、敢ておっしゃいましたことに感服したのであります。）

彼が机を叩いてどのような奇声を発したか聞きたく思うが、この引用に続いて、「啓超習與同志數人私言之、而未敢昌言之。（わたくしも屢々同志數名とこのことをひそかに語り合いましたが、まだ敢て直言できませんでした。）」とあるのを見れば、それが大いにわが意を得た快哉の叫びであつたことは間違いない。「保教」とは儒教を中心とする中国旧來の伝統思想とそれまつわる生活習慣を墨守するというほどの意であるが、「教不可保、而亦不必保」には、韓愈の「原道」を痛烈に批判して、叛君尊民の思想を展開した若き日の嚴復の主張が見られる。そして嚴復のこの一言によって伝統の重庄から解放された梁も、このキャッチ・フレーズが殊のほか気に入らしく、後年自分の文章として屢々使用している。そして梁の場合、この思いが政治的には彼らのスローガン「變法維新」へと發展して行くのであり、文学の面では政治小説の鼓吹へと結実して行ったとわたしは見る。

要するに、彼の政治小説への関心が、中国の未來に対する強い危機感と、救亡への強い使命感とに根ざしていたと、わたしは言いたいのである。